じ条件下にある。ここで注意されるのは、土地の交換にあたり、1坪の2分の1の土地と4分の3との、本来ならば広さの異るはずの土地を「相換」していることである。旧普光寺領には、桧皮葺の建物が1棟あり、その付加価値については詳かにしえないが、あるいは、東大寺領であった二条六坊東北角の坪の東西幅が普光寺領であった二条七坊の西北角の坪よりもかなり狭かったことを示唆しているのではないかと考えるのである。つまり、東六坊大路を挾んで興福寺地に隣接する左京六坊の西辺の坪に限って東西幅を狭く設定することにより、興福寺の寺地の占地を優先させた結果として生じた造営計画長の誤差を解決したのではないかと臆測するのである。

このことを傍証する資料としてもう一つ、先にも紹介した平城京保存調査会の行なった遺存地割による京条坊復原調査のうち、「三条大路上における坊間距離の概測値[160]」を掲げておきたい。それによると、1坊の東西幅の平均距離は、右京の4坊では539.2m、左京の4坊では532.0mとなるが、左京外京域では東四坊大路～東五坊大路間が537.0m、東六坊大路～東七坊（東京極）大路間が523.0mであるのに対し、件の坪の位置を含む東五坊大路～東六坊大路の間隔が516.0mと著しく狭いことが知られる（1坊の計画寸法1500大尺の復原値は532.0mである）。遺存地割は必ずしも直線状にみとめられるものではなく、計測地点によって測定値にはかなりの変動があるものと予測されるものの、この調査成果も先の想定を裏付ける一証左とみなすことができるかもしれない。

以上、外京域の設定についての推論を試みたのであるが、従来の通説のように基準尺の実長が短かったとする積極的な状況はみとめられなかった。また、大路、小路の幅員が狭かったのではないかとの想定も全く想像の域を出ない。むしろ、大岡実の論ずるように、興福寺の占地に起因する条坊計画寸法の短縮という事態を示唆する傍証がいくつかみとめられた。この場合の造営基準尺が大尺であったか小尺であったのかについては現状ではにわかに断定しがたく、この点をも含めて外京域の条坊地割に関してはまだ不分明な点が多く残されている。今後の調査研究の進展に俟ちたいと思う。

Ⅳ 平安京条坊地割復原への一視点

——延喜式左京職式京程について——

延喜式左京職式に記載される「京程」は、平安京条坊の復原研究に際しての基本的な典拠であるとともに、他の都城との比較研究に資するべき重要な史料価値をもっている。裏松固禅の『大内裏図考證』をはじめ、古来この京程に関する研究は数多く行なわれている

が、そこに復原される平安京条坊制度の中で、道路幅員については、京程に示されている数値、つまり築地間距離あるいは路面幅員だけが基準とみなされ、平城京では道路地割設定の基準と考えられ、藤原京でも一定の完数値を得ることができる道路側溝心心間距離についてはほとんど顧慮されていない。ところが、京程に記された諸数値を分析すると、むしろ当然の結果ともいえるが、側溝心心間の規模にも規格性のあったことが知られ、そのことを看過しては平城京などの条坊制度との比較検討は不可能であると考える。

前節までにおいては、藤原京と平城京の条坊地割の検討に終始し、たとえば難波京や最近著しく調査が進められ、興味深い展開をみせている長岡京条坊の考察にまで立ち入ることができなかったが、ここでは今後の研究の基礎資料となすべく、平安京の「京程」に関する若干の分析を試み、合わせて平城京条坊との関連について気付いたことを記しておこう（なお、図中に示した平安京道路規模の数値のうち、路面より下のものは延喜式京程に記載された数値であり、路面より上のものはそこから算出される数値である。また数値に付した大・小尺の単位はいずれも大宝令に規定された尺度をいう）。

京程

南北一千七百五十三丈　今勘千七百五十一丈 今二丈可尋之　四位大外記中原師重之本云除大路 小路各見式文定残卅八町一町卌丈

北極并次四大路。広各十丈。

宮城南大路十七丈

次六大路各八丈

南極大路十二丈

羅城外二丈　垣基半三尺。犬行七尺。 溝広一丈。

路広十丈　今案大路北畔垣半三尺犬行五尺溝広四尺者両溝間八丈八尺

小路廿六。広各四丈。

町卅八。各卌丈。

東西一千五百八丈　通計東 西両京

自二朱雀大路中央一。至二東極外畔一七百五十四丈。

朱雀大路半広十四丈

次一大路十丈

次一大路十二丈　大宮

次二大路各八丈　東西洞院也

東極大路十丈

小路十二。各四丈。　一路加堀川東 西辺各二丈。

町十六。各卌丈。

右京准此。

朱雀路広廿八丈

自二垣半一至二溝辺一。各一丈八尺　垣基三尺。犬行一丈五尺。

溝広各五尺

両溝間廿三丈五尺

大路広十丈

自垣半至溝辺。各八尺　垣基三尺。犬行五尺。

溝広各四尺

両溝間七丈六尺

宮城東西大路広十二丈

自二宮垣半一至二隍外畔一。三丈八尺

自二傍町垣半一至二溝外畔一。一丈二尺

隍溝間七丈

大路広「各」八丈今案宮城以南東西畔垣基犬行溝広等両溝間九丈六尺

自二垣半一至一溝辺　。各八尺　垣基三尺。犬行五尺。

畔溝広各四丈

両溝間五丈六尺

小路広四丈

自二垣半一至二溝辺一。各五尺五寸　垣基二尺五寸。犬行三尺。

溝広各三尺

両溝間二丈三尺

宮城四面。自二垣半一至二隍辺一。三丈　垣基三尺五寸。壖地広二丈六尺五寸。

宮城南大路。広十七丈。　宮垣半三尺五寸。壖地広二丈六尺五寸。

隍広八尺

南垣半三尺

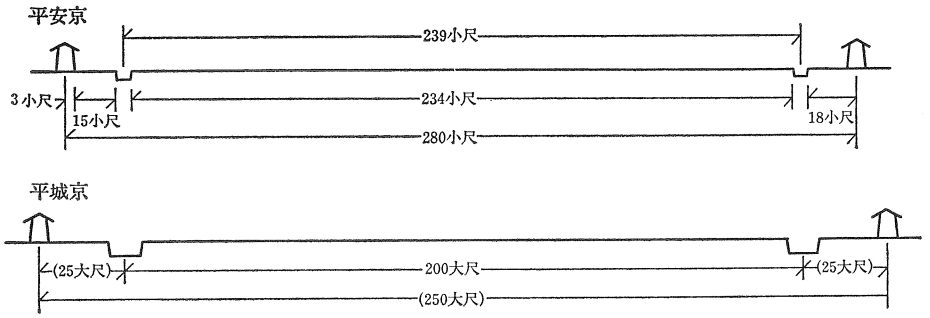
犬行四尺

溝広四尺

隍溝間十二丈

今案傍町無壖地及湟然則垣基犬行溝広南北等同両溝間十四丈六尺

朱雀大路　「広28丈」と記され、しばしば平城京朱雀大路の築地心心間距離30丈（筆者の見解によれば大尺の25丈）との広狭が論じられている。しかし、京程に示された数値に基いて側溝心心間距離を算出すると、239小尺となる。これは平城京朱雀大路について想定

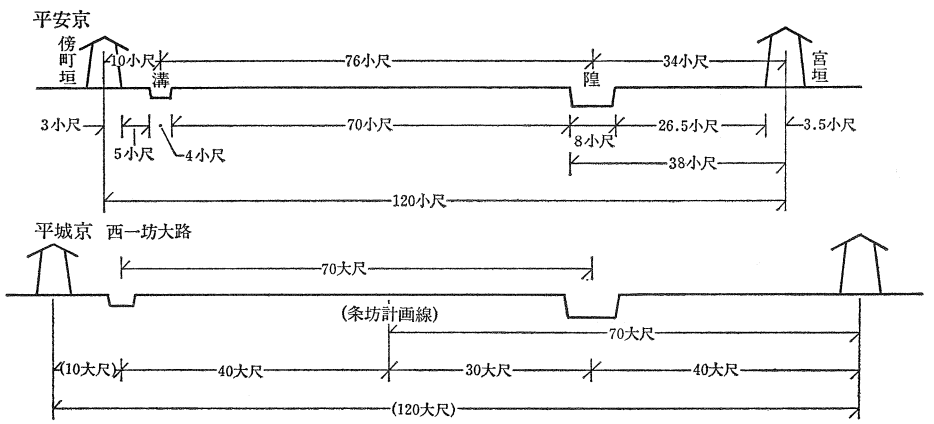


第50図　朱雀大路地割復原図　(1：800)

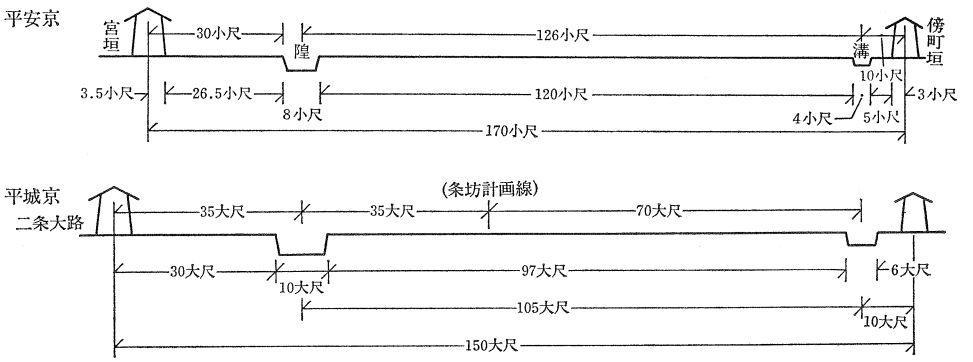
した200大尺すなわち240小尺にきわめて近く、平安京朱雀大路の側溝心心間規模は平城京のそれとほとんど同じであるといえよう。ただし、側溝心と築地心との間隔は平城京が25大尺（30小尺）と想定されるのに比べて20.5小尺とかなり狭い（第50図)。

宮城東西大路　平城京での東・西一坊大路に相当する大路である。築地心心間12丈（120小尺）の規模は朱雀大路、宮城南大路に次いで広い。側溝心心間距離は76小尺であることが知られるが、これは東・西一坊坊間大路にあたる「広10丈」の大路（壬生大路、皇嘉門大路）の側溝心心間距離80小尺よりも狭い。平城京の西一坊大路（側溝心心間70大尺、築地心心間推定120大尺)あるいは東一坊大路（側溝心心間80小尺）との共通項をしいて見出そうとするならば、西一坊大路の築地心心間距離120大尺と12丈（120小尺）との数字上の符合が注意される（第51図)。

宮城南大路　平城京の二条大路にあたる。京程から導き出される側溝心心間距離は、126小尺と半端な数値であるが、これは先にもふれたように、平城京二条大路の側溝心心間設定寸法105大尺と全く一致している（105×1.2=126)。しかし、築地心心間距離は平城京の場合が150大尺（180小尺）であるのに対し、170小尺とやや狭い。ただし、宮大垣心か



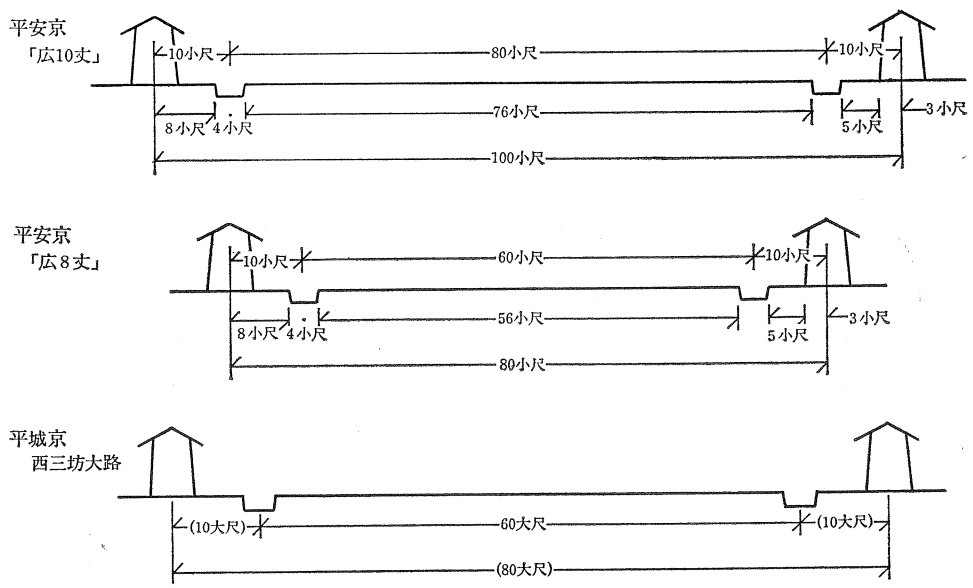
第51図　宮城東西大路地割復原図　(1：400)



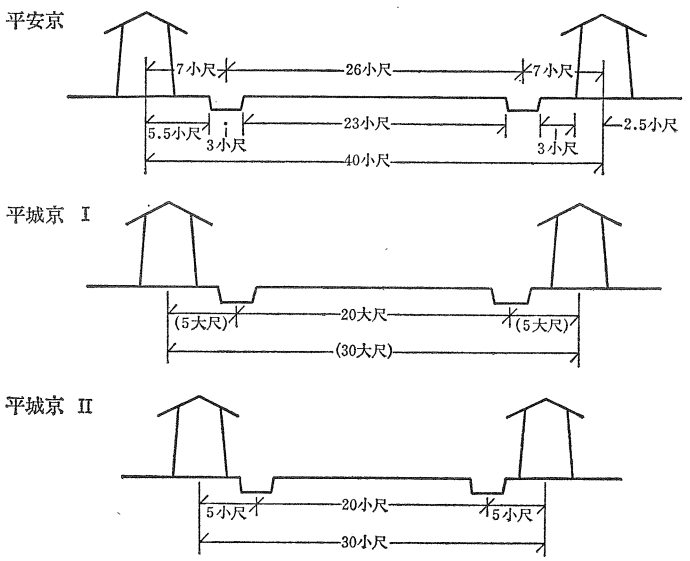
第52図 宮城南大路地割復原図 (1：500)

ら北側溝（隍）北岸までの距離（宮大垣半＋壕地）が、平城京では30大尺、平安京では30小尺であり、符合した数字であることは興味深い（第52図）。

大路 京程に示される大路には、「広10丈」と「広８丈」との二者がある。広10丈の大路の場合、路面幅７丈６尺(76小尺)、両側溝幅４（小）尺と記載されているので、側溝心心間距離は80小尺であることがわかり、広８丈の大路は路面幅５丈６尺（56小尺)、両側溝幅４（小）尺であるので、側溝心心間距離は60小尺となる。このことから、いずれの大路でも、築地心と側溝心との間隔が10小尺に設定されていることが知られる。宮城東西大路や宮城南大路でも、条坊街区の側（傍町）の築地心は側溝心の外方10小尺に設定されており、これが平安京における大路側溝と街区を画する築地との心心間隔の原則的な規模であった



第53図 大路地割復原図 (1：300)



第54図　小路地割復原図　(1：200)

と考えられるが、このことと、平城京の大路にあって朱雀大路を除く全ての例における推定間隔が10大尺であることとの間にも、数字上の符合がみとめられる。さらに、平城京西三坊大路の規模・側溝心心間距離60大尺、築地心心間想定距離80大尺は、広８丈の大路と数字の上では全く一致しており、広10丈の大路の側溝心心間距離80小尺は平城京東一坊大路と同規模である（第53図)。

小路　平安京の小路は、築地心心間40（小）尺、両溝間（路面幅）23（小）尺で、側溝幅が３（小）尺であるので、側溝心心間距離は26小尺となり、平城京小路との共通点は見出しがたい。また、側溝心と築地心との間隔７小尺は、平城京で確認された５小尺よりも広く、大路の場合とは逆の状況を示している。ただし、全体の規模としては、平城京の小路のうち、側溝心心間距離を20大尺に設定した例に近似していることは注意してよかろう（第54図)。

V　おわりに

以上、藤原京、平城京の条坊地割あるいは宮域内区画の地割について詳細にわたる検討を試みてきたが、まだ充分に解明しえない問題も多く残されており、推測に推測を重ねたとの感がなくもない。ここで示した見解あるいは未解決の問題点については、今後の調査研究の進展に伴って、さらに検証され、また修正され、より明確な事実が闡明にされてくるものと期待されるが、この拙い作業を通じて、藤原京、平城京の造都に際して地割測量